

私の犬は、最近、癌との忍耐強い闘病の末に亡くなりました。最初、その分野で経験豊富とされる有名な獣医師の治療を受けました。医師は、先ず、咽喉内にできた腫瘍を切除し、犬が食事をとれるようにしました。手術後、腫瘍は良性のようだと医師は説明しましたが、実は、バイオプシー（＝生体組織検査）に携わった（彼の配下にある）別の医者は、最初から悪性を疑っていたことが後にわかったのです。それから、病院は摘出した腫瘍を2つに分けて、別個にバイオプシーを受けるため、2ヶ所の検査所に送りました。後でわかったことですが、腫瘍細胞に添付された病院側のオリジナル説明書には、リンパ節を切除したことがはっきりと書かれていました。ところが、これが検査結果ですと私達に渡されたコピーには、その部分は切りとられていたのです。従って、癌がリンパ節に転移していたのだという真相を知ることはできませんでした。

次いで、犬に別のしこりができているのを私は発見しました。下部のリンパ節の腫れであることが後にわかったのですが、2度目の手術でこれを切除しました。食道の反対側にも腫瘍がありました。若手の医者から「高名な先生」に進言してもらわなければ、しこりは1つしか除去されなかったでしょう。手術が始まる時に、私が立ち会っていたのは幸いでした。心の中で、この医師の能力に疑いを持ったのはその時からです。

一方、サードオピニオンを得るため最初の手術以来、摘出した腫瘍細胞2片を国際的に認定された検査所に送ってありました。2番目の手術の後で受け取った1度目の手術の結果報告書には、癌はすでにリンパ節に転移していることがはっきりと書かれていました。腫瘍学者の意見は、この段階では手術を続行せずに、放射線処置と化学療法の方に頼るべきだというものでした。

さらに、2度目の手術の際、（カルシウム代謝を調節する機能を持つ）副甲状腺が切除されていました。当方には何ら説明がありませんでしたが、おのずと判断がつきました。犬が発作を起こすようになって、病院に連絡を取ったとき、若手の医者はこのことに関する知識が皆無のように思われました。（犬はパニックになって部屋中を走り回ったのですが、カルシウム欠乏による「低カルシウム血症」によることが後にわかりました。）実際、発作のことを告げても、最初、病院側は「たいしたことはない」と思ったのか、様子を見て下さいと言いました。同じ日の数時間後、発作はテタニー（強直性痙攣）に変わり、私ど

もは犬を再び病院に連れて行ったのです。

午前零時前に病院から電話があり、犬が重い痙攣を起こしていると告げられました。この時点で、「もう駄目かもしれない」と思いました。数時間わたるけいれん発作の後昏睡状態に陥り、2日後、彼は意識を取り戻し始め、弱った体力をふりしぼって何とか歩こうと、けなげにも、必死に闘ったのです。痙攣の原因は副甲状腺の除去による低カルシウム血症にあるのに、医者たちのプロ意識と連携不足のため、病院側は私どもに説明を怠った——この厳然たる事実を見過すわけにいきません。

私どもは、「大先生」に説明を求めましたが、驚いたことに、彼は2度の手術に関してまったく混乱していました。最初と次の手術で何を切除したかも覚えていないし、こちらの質問の仕方によってその都度異なる答をする始末。ある時は、手術をしたのは他の医者だとも言いましたが、それは明らかに誤りです。この有名な病院で6週間治療を受けた後、私どもは、やっと、ある腫瘍学の権威と癌治療を専門にする病院を見つけました。これは大きな救いであり、生涯最後の2か月を専門的治療にゆだねて愛犬に報いることができたのは、せめてもの慰めでした。

愛するペットを、正規の獣医師だからというだけの理由で一人の医者任せするのはよくありません。私がこの文を書く気になったのも、動物を飼っている方にそれをお伝えしたかったからです。また、医師の治療に気がかりな点があれば質問すべきだということを、私自身の体験から、声を大にして申し上げます。良心的な医者であれば、専門家らしく明確に答えてくれるはずですが、また、数多くある獣医学関係のウェブサイトによって、専門的意見を求められますから、かかっている医者の説明が正確で、適切かどうかをチェックすることもできます。飼い主の方には、誰一人として私どもと同じ経験をしてほしくないし、自戒の念を込めてご忠告します——「有名な獣医さん」だからというだけの理由で医者を選ぶのは避けるべきだと。件の病院は、ある時、制酸剤のタガメット2錠に対し5千円という法外な金額を請求してきたのですが、「これも、良い治療をしてくれるからだろう」と私は考えました。何というんでもない思い違いだったことか。

私にとってかけがえのない存在であり、敢然と病気に立ち向かった愛犬は、最善の扱いを受けるに値しました。最後には可能な限り最上の治療を尽すことができたものの、最初に

問題が起きてから6週間もたっていました。（そもその原因は、獣医たちがその病気の治療法に関する十分な知識がないにもかかわらず、経験豊富だと私どもに偽ったことから始まったのです。）皆さまの大切なペットについて、同様の体験をされる方が一人として出ないように、願ってやみません。

さらに特筆すべき問題点

1. 件の「有名病院」は、私の犬の病状記録を腫瘍学者に教えようとしませんでした。エックス線写真数枚と血液検査のコピーをしたものの、それに、最初の手術の写真数枚をくれただけです。2度目の手術の写真は、最初、病院内には見当たらないと、うそを言われました。4時間にわたる大手術の間、手術室の外で待機していた私は、ナースが手術の写真を取るのを目撃していますと言うと、ああ、ありましたと出してきました。

2. 病院は、犬の咳を抑えるために抗生物質を処方し続けました。後にわかったのですが、癌の初発部位は扁桃腺だったのです。医師側にはその見解はなく、他の箇所を疑っていました。原発巣をつきとめようとする試みも、段階づけも提示されませんでした。

3. 病院で治療を受けている間に、専門医への紹介をもちかけられたことは一度もありません。私は自分で腫瘍専門医を見つけました。私が癌専門の獣医師を見つけた後に、「以前から知っている方ですので、ぜひ紹介させて頂きたい」とこの高名な獣医師は言うてのけました。それならば、なぜ前もって紹介してくれなかったのだろうかと思いました。さらに、「日本で放射線治療が受けられるか」と私どもが質問すると、医師は、「まず無理でしょう。アメリカに比べて数年遅れていますから…」という意味の返答をしたのです。配下の医者も、「日本では放射線治療は法律で規制されているんです」と「大先生」を援護しました。実際には、進行性の悪性腫瘍がすでにリンパ節に転移しているのを、病院側は知っていたのですから、2度目の手術は避けるべきだったのです。それにしても、愛犬は、もっと早い段階で放射線治療を受けられたはずでした。放射線が可能であることを病院側は隠していました…その理由は、巨額の治療費を取り続けたいと思ったからかもしれません。最初の請求額は約150万円にのぼりました。